

教育・子ども政策調査特別委員会会議記録

教育・子ども政策調査特別委員会委員長 吉田 敬子

1 日時

令和4年1月13日（木曜日）

午前10時3分開会、午前11時51分散会

2 場所

第3委員会室

3 出席委員

吉田敬子委員長、千葉秀幸副委員長、関根敏伸委員、小西和子委員、佐藤ケイ子委員、
工藤勝子委員、臼澤勉委員、武田哲委員、工藤大輔委員、佐々木努委員、
千田美津子委員、木村幸弘委員

4 欠席委員

なし

5 事務局職員

八重樫担当書記、藤澤担当書記

6 一般傍聴者

なし

7 会議に付した事件

- (1) 委員席の変更
- (2) 不登校児童生徒への支援とこれからの学校のあり方について
- (3) 次回の委員会運営について

8 議事の内容

○吉田敬子委員長 ただいまから教育・子ども政策調査特別委員会を開会いたします。

なお、佐々木努委員は少々遅れますので、御了承願います。

これより本日の会議を開きます。本日は、お手元に配付いたしております日程により会議を行います。

初めに、委員席の変更を行いたいと思います。

先の委員長の互選に伴い、委員席を現在御着席のとおり変更いたしたいと思いますが、これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○吉田敬子委員長 御異議がないようですので、さよう決定いたしました。

次に、不登校児童生徒への支援とこれからの学校のあり方について調査を行いたいと思います。

本日は、講師として、前岐阜市教育長、早川三根夫様をお招きいたしておりますので、御紹介をいたします。

早川様の御略歴につきましては、お手元に配付いたしている資料のとおりでございます。

本日は、不登校児童生徒への支援とこれからの学校のあり方についてと題しましてお話しいただくこととなっております。

早川様におかれましては、御多忙のところ、この度の御講演をお引き受けいただき、また遠方からお出でいただきまして、改めて感謝を申し上げます。

これから講師のお話をいただくことといたしますが、後ほど早川様を交えての質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、早川様、よろしく願いいたします。

○早川三根夫参考人 皆さん、おはようございます。本日は、一番盛岡らしいときに来られて、本当に嬉しいです。やはり雪国は、雪のときでない。

これは、岐阜市ですけれども、金華山の上に道三、信長が築いた岐阜城があって、そして接待のために鵜飼をやるということになったようです。お越しくくださいませ。

私は岐阜出身で、大学生のときは横浜にいました。その後、一般の小中学校の教員をやって、県教育委員会をやって、そして岐阜市の教育長をやって、恐らく県内の多くの先生方の普通のパターンだと思います。それ以後、中央教育審議会の委員のときは、教育委員会改革をやりました。それから、岐阜大学の客員教授をやったり、衆議院の文部科学委員会の招聘も受けておまして、現在は、大学関係のことや、民間の企業の顧問をやらせていただいています。

今日は、不登校の子の問題を、私自身の失敗の物語ということで、お話をさせていただこうと思います。まず最初は統廃合の問題がありました。岐阜市のど真ん中のドーナツ化現象で、岐阜駅と、岐阜駅の真ん前の校区の二つの小学校を一つに統合するという話が始まりました。それで、岩手県の市町村立、県立のレベルでもあると思いますが、統廃合を進めるというのは、必ず総論賛成、各論反対となります。しかも各論のほうが具体的なので、強いですよ。総論は、夢を語る人が多いですけれども。

集団生活の中で学ぶ社会性や、より多くの仲間の多様な考え方に触れる機会、お互いに切磋琢磨する環境、多くの仲間と認め合い、協力し合う環境など、それらは、将来社会を力強く生き抜くための力であるコミュニケーション能力の育成として必要なのだということで、そのために各学年複数学級を確保し、クラス替えができる一定規模の学校にしましょうよということはコンセンサスが得られるわけです。

地元の統合準備委員会や、地元の自治会長さん、青少年育成市民会議の方に集まっていたいて、話し合ったのですけれども、結局結論が出ませんでした。話し合いの結果、統合は必要であるが、通学先の決定は教育委員会に委ねる。また、跡地利用は地域の最重要課題なので、それをきちんとセットで示せということになりました。

そして、我々はこちらの校舎でと決めたのですけれども、そうすると校舎がなくなる地域の人たちは、コミュニティ・スクールだと言っておいて、コミュニティを無視しているのではないかと、街中居住と言っておいて、これから人口がふえていくのに将来推計を無視す

るのか、中心市街地活性化と言っておいて、子供がいなくなって活性化するのかななどの意見があり、教育委員会内では、統廃合問題は教育長の首が飛ぶというぐらいの大問題と例えられ、大変体力の要る作業になるわけです。

私ども教育委員会の立場としては、いたずらに統合を先送りすることはしないと仰いました。その学校でもう育ってしまうので、いい環境を与えるのが当然だろうと。まちづくりとか、そういうことはあるかもしれないけれども、子供たちの利益のために判断すると。子供たちにとってどうなっているかというのが全ての問題の基本であり、これは必ず困難な決断ではあるけれども、決断するのも教育行政の責任であると。私たちは、丁寧に説明責任を果たしますよと言うのですけれども、やはり丁寧な説明と見切り発車をどこかでしなければいけず、それらは乱暴な教育行政という批判を受けるわけです。

だけれども、統廃合が決まった以後は、幸いに御理解いただいて、非難はなかったというところでございます。

では、跡地活用をどうするかという話になってまいりまして、いいものにするということが、御理解いただくために重要になっていきます。だけれども、これは教育委員会だけでは決められないところです。

小中学校の教職員の場合、人件費が県費負担ですので、公立学校を維持することは、市単独の施設をつくり、そこに人件費を入れてお金がかかるよりも、学校をそのまま放っておいたほうがまだ安上がりだよということはある得るわけで、だから財政上の問題があるのではないかと市民の皆さんはいろいろ勘ぐられますけれども、実際はそんなことはあまりないわけで、むしろ後でお金がかかるものをつくるほうが大変な問題で、市にとっては経費節減とは言い難く、真に子供たちのためになるのはどんな跡地施設かというので我々もいろいろ考えました。

京都のまなびの街生き方探究館というところでは、京都のど真ん中の学校の廃校を利用して、京都は大企業がたくさんございますので、金融とかマスコミとか製造業、サービス業とか、それぞれの業態の人たちがブースをつくって、そこで子供がお金を用意して商品を買ったりするというのをやるわけです。見たらすごく素敵に見えたのですけれども、後になるとやはり結局ままとかなという感じもして、これでお金使うのも難しいかなと。でも、岐阜市らしいやり方としては、例えば1階は地域の人たちに開放しますよ、2階は市民の人たちにキャリア教育やってもらいますよ、3階は大学や企業に入ってもらい、子供たちのためにアクティビティーをやってもらって、4階はNPOで自分たちのことを広げてもらいますよというようなことをして、バスでここに通わせていくというように、これはかなりの制度設計まで行きました。

それから、もう一つのアイデアとしては、英語教育、国際理解教育です。韓国の大邱では、それぞれ世界の学びが体験できるブースを設置した施設があります。これも前市長はかなり興味を持っておりまして、これでいけばいいではないかと言うけれども、これはやはり人件費かなりかかるということで難しく、悶々とした気持ちなのですけれども、早く

提示しなければいけないというときに、教育機会確保法という法律が制定されました。

これは、2016年の12月の通常国会で提案されて、2017年2月に施行されました。不登校児童生徒が行う多様な学習活動の実情を踏まえ、個々の不登校児童生徒の状況に応じた必要な支援が行われるようにすることと、ちゃんと書いてあるのですね。不登校児童生徒が安心して教育を十分に受けられるよう、学校における環境の整備をしなければいけない、これはやっていると思います。

さらに、特別の教育課程に基づく教育を行う学校の整備と書いてあって、不登校児童生徒に対し、その実態に配慮して特別に編成された教育課程に基づく教育を行う学校の整備と、ちゃんとここに書いてあるのですね。これはできるのではないかと思います。こんなことも法律にちゃんと書いてあるのに、我々は知らなかったということで、夜間中学もこの中に入っているのですね。だけれども、ここまでしっかり国が文言を書き入れているのには驚きました。

実際に不登校の問題はどんどんふえています。岐阜市は、県や全国の出現率よりも高いということで、これは大問題だという問題意識は皆さんもお持ちだと思うのですね。4%近くの子供たちがそうであるということで、発達障がいの子が6%から10%という中で4%というのは、かなり大きな数になっているわけです。

それがどんな困難な状況かという、少し古い資料で申し訳ないですけども、高校中退の子供たちがその後どうするかというもので、就職するのは61%、ニートは21%、学生17%、正規が36%、非正規が64%というデータです。これは、今はもっとかなり悪いと思います。だから、高校を中退した場合、正規職員になる確率は36%しかなくて、かなり厳しい状態だということです。

さらに、中学校3年生で不登校だった子供たちも、やはり同じように正規29%しかないということで、高校の中退よりもさらに困難な状況に追い込まれているということです。

このニートになる割合というのがどういう数字かという、高校中退者で21%、中学校の不登校者で17%になるというのは、多いか少ないかというのは分かりにくいのですが、一般の中学生や高校生は2%で、岐阜県の場合調べたら1.1%でしたので、その出現率は20倍程度になっているということです。これはやはり深刻な数字なのだろうということですが、だけれども見方によっては、そういう見方と同時に8割ぐらいの子供たちは、それを乗り越えていける可能性があるということあるわけですし、過去において自分が不登校であったという著名人はたくさんいるわけですから、その可能性をどう広げていくかということが大事なことになるだろうと。

子供たちは、やはり学校や社会に対して違和感とか孤独とか不安を感じているわけで、それに対して今までの学校のありようが適合しているのかと。だけれども、学校が、または学校以外の場が、社会とつながる場所として何かをつくり上げていかなければいけないだろうと。この違和感こそが、時代を変える可能性になっていくということがあるので、そこを生かしていく仕組みが要るのだろうなと思ったわけです。

では、なぜ不登校がふえているかということについては、いろいろな専門家もおっしゃいますけれども、私なりに、ちょっと抽象論になって申し訳ないですけれども、世の中はグローバル化しているわけです。インターネットがあって、少子高齢化、片方で自然崩壊があって、拡大を前提とした経済が行われているということですが、なかなかこの辺の調整が昔からうまくいっていないのです。例えば能率化はビューティフルでなんていうのは、40年、50年ぐらい前にもう問題提起はされていたのですけれども、けれどもこれに対しての答えはなかなか持ち得ないのです。

要するにどういうことを言っているかということ、社会が変化しているのです。それは自己責任ですよという中で、子供たちは比べないとか競わないとか頑張らないということが価値としてあるのだよと多くの大人が言ってくれるわけです。ボーダーレスであり、多様化が認められるのだよと言うけれども、そうした中で子供たちは自分の居場所をなかなか見つけられなくて、不安とか孤独があるのだらうと。

個人主義や自己責任ということが強調されて、片方でコミュニティが崩壊するわけです。岩手県みたいところは、雪下ろしが大事なのだらうと思っただけですが、コミュニティを維持するために。そういうことがあるから、都会よりはまだ可能性は多く残っているのだと思いますけれども、片方で自己責任とか言われて、居心地のいいスマホとかゲームがあればそっちへ入り込むのは当たり前でして、それが分断やポピュリズムで貧富の格差をつくり上げていくという状況になっているのだと思います。

問題は、孤独とか不安で、そこから逃れるためにというか、一つの表現として不登校があるのだらうということには理解できるわけですが、ここから先はちょっと私も心配しながら喋るのですけれども、私は鑑別所の委員もやっていたのですが、鑑別所の所長さんからお話を伺うと、やはり社会の一番困難な状況の子供たちがあそこには来るのだと。戦後すぐは、やはり貧困だったと。それから、昭和の後半は暴力的な子供、それから外国籍の子や発達障がい、不登校の子が今来ているということで、一番社会の中で弱者に追い込まれやすい子供たちがそうしたところで居場所を失われているということがあるのだということはおっしゃっていました。

それで、そうした問題意識と教育機会確保法をつなげて、不登校の特例校としていけるのではないかと思ったわけです。それで、既にもうその当時全国に8から11校程度ありました。京都の洛風中学校とか、西濃学園というのは岐阜県内の私学ですが、これは全寮制です。それから、八王子の高尾山学園なんか見させていただきました。県内の通信制や定時制の高校も見させていただいて、フリースクール等も見学をしました。

その中で多くの人が言うのは、学校の建物が不適格なのだ。学校みたいところが嫌なのだから、学校みたいな建物では子供は行かないよということ言われたのです。そうするとまたお金がかかる話になってしまいますよね。空き教室を使おうと思っているのに。

それから、地域が嫌だということがあります。地域が怖いと。特に通信制の高校へ行く子供たちや、定時制の子供たち、昼間の定時制もありますから、そうした子供たちに「ど

うしてここなら来られるの」と聞くと「地域がないから」ということを言います。我々は、地域はいいものだと思っていますけれども、そうではない子供たちもいます。

だけれども、建物を建て替えるというのはどうしても我々ではできないので、公立でやること、ソフトの範囲で工夫して考えていく上で、彼らの話はなかなか参考になりました。

自分のペースで学習ができなかった。自分で決められるのはいいが、決められない人もいるのではないか。服装は自由でいい。でも、制服のほうが楽かも。なぜこんなことに時間をかけるのかと思うことがあった。合わない先生がいる。担任を選べるといい。必ず毎日登校しなくてもいいというのは気が楽。地元の中学校の生徒とは会いたくない。保健室や職員室、相談室でゆっくりできるスペースが欲しい。トイレがきれいなことはとても大事みたいなことを生徒が言ってくれまして、ああ、そうなのだと思います。

もう一つは、そうしたことを現実でどうしていくかという話と、理想の学校というのはどういうことかということについて、我々も仕事上付き合いのあった京都大学の教授とか、東京大学の教授とか、NPOの代表の方とか、ベネッセ教育総合研究所とか、岐阜大学の医学部の先生とか、そういう先生と理想の学校というのはどういう学校かと話し合いながら、それを現実で、箱の中でお金をかけずにやるにはどうしたらいいかということを考えていったわけです。

その中で、先ほどの京都大学の教授からは「バーバパパのがっこう」という作品の紹介があって、内容は、バーバパパがみんなで学校をつくるというお話なのです。生徒たちが全然学校に来なくなって、どうしたらいいのだと。自分たちの学校をいろいろ相談しながらつくって、皆が学校へ来るとい話なのですけれども、こうした学校がいいのだということ、京都大学の教授はお話しになっていました。

恐らく岩手県もそうだと思うのですけれども、私は、いい学級をつくり、団結力のある学級をつくり、団結力のある班をつくり、そして部活動を活発にやらせる先生がいい先生という評価だと思うのです。集団活動を重視し、そうしたことができる先生をいい先生だと評価して、教育委員会に入れて、管理職にして、自分の成功体験を部下に押しつけるという、そういう教育界の伝承があるわけですね。

片方で、いろいろな人が言っている、GIGAスクールができたのだから、個別最適化をしなさい、対応するようにしなさいと。それは学校も分かっているのですが、よく校長はこういうことを言いますね。「素直だけれども、主体性がない」と言います。こんな人いませんよ。素直で主体性がある人。主体性があれば、大抵素直ではなくなります。

だから、いかに学校という仕組みが子供の主体性に寄り添うことをやっていないというか、やれていないのです。だけれども、片方で教育委員会が学校訪問しても、この学校は規律が正しいですねとか、時間を守っていますね、子供たちが活発に動いていますねと褒めるわけですね。だから、集団指導や規則や時間を守る、明るくはきはきとということ、を学校の最も重要な価値として学校は運営しているのです。いろいろな場面で、子供の主体性を除去している場面がどうしても学校にはあるのです。それは、仕方がないのです。

集団指導として子供たちに力をつけようということが前提となっている学校ですから。

そうした中で、多くの子供はそれにフィットしていると思いますよ、私は。

この前新聞を読んでいて思いました。ショパンコンクールで入賞した方の話です。彼も、自分は才能があって、才能を開花させたわけではなくて、私は学校の運動会が大好きでした、あそこが私が一番伸びた場面ですということをおっしゃっていました。災害があった後、子供たちが久しぶりに学校に行ったら友達に会えて嬉しいというのは、多くの子のありようだと私は思いますけれども、しかしそうした中で、子供の主体性を除去する装置としての学校のありようがあるとしたら、それは改善していかなければいけないと思ったわけです。

ここの個別最適化というのは大事なことで、やっていかなければいけないのだけれども、学校の先生は多忙化しており、効率的にやるには集団指導というのが一番いいわけです。学級を母体にして子供たちを育てるといえるのは一番いい、効率的なやり方であるのは間違いないわけです。だけれども、そこからはみ出る子供たちについて、今の学校の仕組みは対応できているかということは、私も問題意識を持っていたわけです。

多くの子にとって、学校は輝ける場所であるのは間違いないわけですし、それが日本の教育のよさとして世界的にも評価されているのです。みんなで掃除をやるとか、時間を守るとか、班の活動を大切にするといえるのは、すごく評価されている。日本は秩序正しいとか、時刻に正確だと評価されているわけです。機会均等を大切にして、そして集団の中での個性化を図るといえるのが日本のやり方なのです。

十把一絡げでもない、方々へ行こうとしているわけではない、集団の中で一人一人のよさをどう生かしていくか、先生たちが苦勞していることは、日本の教育のよさであるわけです。しかしそこに違和感を感じる子供たちの可能性をきちんと見なくてはいけなくて、一層多様化していく家庭に合わせて学校も多様化しようと思いますけれど、現在のこの仕組みでは、その多様化に対応するのは難しいと思います。そうしたら、学校以外の多様な場というのは必要でしょう。不登校やいじめ、今教育機会確保法が出て、それを各学校や各市の中でやっていく必要があるだろうということを感じるわけです。

だから、今はどこの地域に住んでも同じ教育が受けられる義務教育の機会均等と質の向上ということが大事にされて、それは日本の津々浦々どこへ行っても学びができるということは、素晴らしいことだと思うのですよ。私は昨日宮古市まで行きましたけれども、バスの途中で山間部にも素晴らしい学校が幾つかありまして、本当に素晴らしいなと思います。こういうところで、雪の中、学校へ通って、子供たちが元気に生活しているのだなと思って、感動さえ覚えましたけれども、しかしそれに合っていない子供たちがいるとしたら、市町村単位ではなく、全体の中で機会均等ということを考えていく必要があるだろうと思うに至ったわけです。

そこまでは順風満帆でしたけれども、今までいいなと思っていたのですけれども、岐阜市でいじめ自殺があったのです。2019年7月3日の午前8時にお子さんがアパートから飛

び降りまして、私もマスコミの前に立っているいろいろ対応してまいりました。7月3日にお子さんが飛び降りて、7月12日には第三者委員会を立ち上げて、その年のうちに結論を出してくださいとお願いして、16回やりました。毎回こうやって会議が終わった後に廊下へ出ると、マスコミの方がばあっと来ました。

その後、再発防止の取り組みをして、条例はあったのですけれども、それを全面的に見直して、いじめ対策監というのを各学校1人ずつ市の単独予算で配置しました。いじめを見逃さない日というのを月命日の3日に、子供たちに大人が語る日をつくってもらいました。

2020年に示談が成立しました。それで、草潤中学校を開校することになって、ちょうど軌を一にしたわけですけれども、70回ぐらい御遺族と面会しました。私が辞めるときに、去年の3月31日に辞めたのですけれども、4月23日に地元の新聞の記者がこう書いてくれました。「教育長が引責辞任をするケースも多い中、教育長自身が遺族と対話を重ね信頼関係を構築し、再発防止策につなげたのは異例といえる。」というように書いてもらいました。

私は、世の中は非常に困難な状況に陥るし、大変なことがあるわけですが、一つやはりどれだけ御遺族に寄り添うかというのはガイドラインに書いてあるわけですね。やはりどれだけ会うことができるかというのは、非常に大きなポイントだったと言えると思うのです。そのためには、次に会う約束をきちんとしていくこと。

生徒指導でもそうですけれども、様子を見ていきましょうねというのは、親としても不安ですよ、やはり。先生もその場を言い逃れできたいみたいで。では、来週の金曜日にもう一度電話しますよとか、そのようにしていれば、その間いろいろ悩みがあっても、そのときに吐き出せばいいと思うし、次先生にこんなこと言おうと思う。

私も最初は、1週間に一遍、来週の木曜日に伺いますとか、そのうち2週間に一遍ぐらいになって、ずっと教育長の間は2週間に一遍ずつお会いしました。次はこのときです、このときですと。その間あったことをぶつけていただきましたし、私も外で何言われても、この人のために私の人生はあるのだと思って、私にとってもカウンセリングでした、彼らに会えることは。

そうして、4月になってからは、これからは末永く友人として付き合い合ってくださいと言って、1カ月に一遍ずつ私が行ったり、向こうから私の家へ来ていただいたりしている仲にはなっているのですけれども、やはり次回会う約束をきちんとしていくというのは結構ポイントではないかなと思います。会った時間が信頼の時間になるのだろうということです。

このいじめは、学級、班、部活という狭い世界で起きていて、土日ショッピングモールへ一緒に行っていたのですよ。本屋も一緒に行っていたから、親は仲のいい友達だと思っていたのです。その学校は、班長が班員を選んでいたので。加害生徒が班長で被害生徒が班員。最初からあいつを自分の班に入れようと。部活も一緒だったと。部活で賭けを

するのです。加害生徒が強いことを分かっていてやって、土下座をするか、お金払うか、サンドバッグになるかと彼に言ったのです。それがまた修学旅行で激化して、授業中も先生が前を向いているときに後ろを向いてびんたを振ったということが後から証言でわかる。本も買わせていたと。教育委員会の訪問日にトイレで土下座をさせていた。彼の自尊心は、そこで一気に崩れていったという。

第三者委員会からは「多くのいじめが目を追う毎に激しくなり、自死の主要因となった。学校のいじめへの対応の不十分さによって、いじめの激化を止めることができなかった。」という結論をいただきました。

その詳細については、後でまた紹介いたしますが、いじめ条例の見直しのために私は多くの生徒とディスカッションをしまいいりまして、3,000人の子供からいろいろな意見ももらって、それに朱書きをして全部返しました。その内、一人の生徒はこう言いました。「成績をよくするために、さまざまな役割演技を強いられているのです。先生に相談したいことはあるけれど、忙しそうで話しかけることはできない。『ちょっと相談があるのです』と言うのは無理なのです。僕らは、大人が思っている以上に複雑な世界に耐えて生きているのです。」と中学生は言うておりました。

私たちは、人間関係が高くてルールが高い、団結力のある学級で活発な授業をやる先生をいい先生だと評価して、教育委員会に引っ張り出しています。人間関係が低くてルールが高いのは管理教育ですし、人間関係が低くてルールが低いのは学級崩壊になります。人間関係はいいけれども、ルールが低いのは馴れ合い集団になっています。

我々は、岩手県内のどの先生もこういう学級をつくるために努力している。しかし、その中で子供たちは何をしているかという、演技を強いられて、過剰適応して内申や進路のために先生に合わせようとしている実態が見えてきたのです。

この学校は、毎年研究発表をやる学校で、優秀な先生が集まるということで有名な学校で、その地域のアパート代も土地代もほかのところより高いと言われている学校。その学校で、先生たちは競い合っているいい学級づくりをし、いい学校だ、進学率のいい学校だと言われ続けている中で、子供たちはこうした気持ちでやっていたのです。今回の岐阜市のいじめの加害生徒たちもみんな教育熱心な家庭のお子さんでした。決して文句を言わない、いつもにこにこしている優しい子がこういう思いをしていたことが分かるのです。

子供たちは、いろいろなストレスからストレスを受けているのだと思います。そのストレスが不安に変わって、その不安が不登校になったり、ひきこもりになったり、いじめの加害者になったり、薬物、アルコールに手を出したり、あるいはゲーム依存になってくるのだと思います。不安は不幸よりも怖いと言いますから、その不幸よりも怖い不安をどう解消していくのか。だから、もしかしたらふと不登校になったほうがよかったかもしれないという。彼は一日も休んでいないのです。学校は行かなければいけないものだと思います。その不安がストレスに向かうというのは、我々の前の世代の学生運動の人たちのありようだったのだと思いますけれども、それはレジスタンスとして正しいわけで

すけれども。

でも、この不安の解消の仕方はないのかということ、あるのです。子供たちは言っているのです。「相談したい」と言っている。相談したいことはある。それは先生以外の人でもいいのです。聞いてくれる人がいれば、相談したいことはあるのだということは言っていてくれるのです。

亡くなった彼からのメッセージを条例にし、そして草潤中学校に込めていくという、不登校特例校をつくる意義がより明確になってきた。必ずつくらなければいけないなと思ったわけです。

では、これから制度設計をどうしていくかという話ですけれども、これが統合した学校の残った方の学校で、こんな学校でした。まちの真ん中です。

昔は、特殊学級と通常学級で分けていましたけれども、今はスペクトラムとあって、発達にはいろいろな要素があって、虹のようにいろいろあるのだと、軽度発達障がいという言葉も出ていて、びしっと分かれるものではないよ、いろいろな悩みを持っているよといいます。これを学校でやりましょうよというけれども、ふっと気がついてみれば、赤外線や紫外線もあるでしょうと。学校が全て受け入れることができると、やはりそれは難しいだろうなという。むしろ赤外線や紫外線の中に可能性があるわけですから、そうした考え方も機会確保という点では考えていく必要があるのだろうなということです。

これは、前川さんと寺脇さんが書いた本に書いてありましたけれども、マイノリティーはマジョリティーなのだ。貧困家庭、ひとり親、発達障がい、LGBT、ぜんそくとか、外国籍とか、特別支援とかやっていけば、足し算をすると52.5%になると。もうみんなマイノリティーでしょうという、それがもう多数ということで、こうした認識が学校の中で必要であるけれども、しかしこの多忙化の学校の中でどうしていったらいいかという問題があるのです。

もう一つは、いろいろな子供のいびつな可能性を力のある先生はぼきぼき折ってしまうのです。私もそれをものすごく反省しています。授業の中で一つの答えを導き出すために、関係ない発言をどんどん、どんどん、ぼきぼき折って行って、それは力のある先生ほどやりがちなことなのです。子供はそれに合わせようとするから。でも、このいびつな頂点で日本の国も考えていかなければ、この国のありようというのではないでしょうという。力のある先生ほど「調和の取れた」という美名の下で、ぼきぼき折っているのです。

学校の現状と問題点です。調和の取れたという美名の下で、子供の発展可能性をへし折ることがある。成績をよくするため、さまざまな役割演技を強いられている。先生に相談しようということはあるけれども、忙しそうで話しかけられない。内申を上げるという目先の目標のために自分らしさを抑え、外部からの枠にはめられる人間関係に精力を使い、ストレスを感じ、攻撃的になるような思春期ではもったいない。多様で複雑になったと。学級、学校も多様であろうとするが、結局のところ一様で、学校というのはなんやかんや

言いながら競争的なのですよと。学校のありように適応している子は教育効果が高いが、そうでない子には苦しい場所になっていると。全ての子に今の学校が望ましいとは言えない。均一性の中では発展可能性への期待は薄い。学びを一層多様にする必要があるのだと。集団性、関係性の中で個性化を図るだけでは行き詰まっていくのではないかと。子供たちの持っている潜在能力を開花させる仕組みが必要なのだということです。

解決のための方向性としては、不登校の8割近くの子は経験を乗り越え進学し、社会で働くことができおり、不登校がその後の人生に決定的な影響を与えないようにすることが大事なのだと。学校への復帰を目標にするのではなく、社会的自立を目標にすることで、子供たちの持っている社会や学校に対する違和感が次の時代をつくり上げる可能性に導いていきたい。不登校であったという著名人はたくさんいる。将来大きなハンディにならないよう、自分が社会から受け入れられていると感じる場の確保が必要だと。不登校になる子が学びの場をなくし、その可能性の芽が摘まれることを防がなければならない。あなたに学校のほうが合わせるもう一つの学校、オルタナティブスクールというらしいのですけれども、もう一つの学校があるよというメッセージです。従来型の共通のゴールに向けた教育からの転換。画一的レディーメードから個別最適化されたオーダーメードへ、学びは多様にある学校をつくりましょうということです。

方向性としては、学校の常識とまずは180度逆の発想を持って、市全体で学びの多様性を保障する、選択できることを重視したもう一つの学校として位置づけましょうと。登校とオンラインを必要に応じて必要なだけ適宜学べる学び方にすると。草潤中学校は、岐阜市のエールぎふという子ども・若者総合支援センターと連携し、フリースクール等の他の居場所とも情報交換をし、包括的な体制づくりの中核として位置づけていきますと。その成果が一般の学校でも活かされ、特例校的なカリキュラムを実践できる分教室への展開をしていきます。草潤中学校は、不登校のための学校ではなくて、未来の学校だと言われるようにしたいということを考えてまいりました。

まずは180度逆の発想でということをお大事にしまして、校章、校歌というのは学校をつくる時にはあるのですけれども、それは必要なら後でつくればいいよ。制服はもちろん自由です。給食は好きな場所で好きな子といろいろな方法で食べればいい。担任は4月に決めるのを子供が選ぶようにしたらいい。授業は教室でというのではなくて、場所は自由です。通知表も子供と相談しますよ。教員も公募しますよ。レディーメード型の学校からオーダーメード型の学校。学校に皆さんが合わせるのではなくて、皆さんに学校が合わせますよというメッセージを出したわけです。

そして、草潤中学校は「ありのままの君を受け入れる新たな形」ということで、2年目のパンフレットを皆さんにお送りしていると思いますが、こうした学校になってまいりました。

開校に向けた予算は3,700万円しかかかっていません。一番かけたのはトイレ、1,100万円。それから、ほかの工事が200万円、机、椅子に1,600万円、図書に280万円、その

他に 520 万円ということで、これは本当にお金をかけていないなと思いますけれども。

その分、地域の応援がすごかったのです。やはり統廃合について、皆さん大変苦しまれたので、この学校の意味についてはすごく理解してもらえました。それから、個人の寄附もすごく多かったです。企業を除いて、300 万円の寄附もありました。校務員、用務員とおっしゃる方が皆で色塗りなんかをしてくれて盛り上がりました。これは、市内の用務員というか、校務員というか、どういうふうにお呼びになるか分かりませんが、その人たちが、まずごみの掃き出しからペンキ塗りなどを全部やってくれました。何千万円の作業だと思います。地域の人も力を合わせてやったり、草潤中学校だからあそこを緑色に塗ろうよと言って、塗っていただいたりしました。

定員については、3 学年あって 40 名ということにしました。これは、県の配当なのですが、配当する人数で 1 人の先生が一番効率的に見られる数が全体で 40 人だろうということにしましたし、大都市の京都でも、あそこは定員 40 人だけでも、32、3 人しか集まらなかったというから、京都でもそれだけだし、しかも校舎も新しい校舎になっているわけではないから、集まらないだろうと思って 40 人にしました。1 学級 13 人程度で、40 人に加えて、在籍校でも支援できる形ということですが、それはまた後で説明します。

10 月に学校説明会をして、説明会には 222 人の生徒が来て、保護者、一般合わせて 571 人も集まってしまっていて、期待の大きさに驚きましたけれども。懇談を受けたのは 160 名。それから、その後学校説明会をやって 109 人が来て、最終決定は入学者 40 名、通級指導教室で受けるのが 25 名、オンラインを途中で作りまして 25 名。これだけをフォローアップすることになりました。

2 年目もほぼ同じ数なのですが、2 年目は 2、3 年生の子供はいるので、若干名は入れようと思っていたのですが、中 1 は 22 名、中 2 は 35 名、小 6 が 60 名ということで、結構やはり市外の子が多いのです。市内 66 名で市外 19 名。市外の子は、入学するときには岐阜市内に移っていただくというのがもちろん条件になっております。

2 年目もたくさん希望があるということで、特例校というのは何が特例校かということ、一般の学校は 1,015 時間で授業をやることになっていますが、それを 770 時間に減らして、その減らした分をソーシャルスキルを身につけたり、登校の時間をおくらせたりとかいうことで、やるのに国との折衝が必要だということです。昔は、国がイエスというのに時間がかかったようではありますが、国もその辺はハードルが下がってきたとは聞いておりますが。

40 名学校へ来る子と、それから学校には来ないけれども、在籍校に籍を置き、週 1 日通級という形で学校へ来る子供たちが 25 名います。ここで面白いのは、通級は 4 時ぐらいから 8 時ぐらいまでの夜間でやっているのです。トワイライト通級といって、教員の勤務時間をずらして。地元の学校に通っている中学生は、その昼間の 1 時間行くと、行って帰ってくるのに前後 1 時間ずつかかり、2、3 時間抜けてしまうのです。それで、向こうの学

校が終わった後に、受け入れるというトワイライト通級をやっています。それから、それ以外にオンライン支援というのを25名やっています。

岐阜市の真ん中の草潤中学校ですが、岐阜市全体から子供が通ってきているということです。保護者送迎が17名、バス15名、自転車7名、徒歩1名だそうですけれども、意外にバスが多くて喜んでいますが、毎日登校する人が27名、数日登校が9名、オンラインの子が4名というようなことのようにです。

こうしたいろいろな場所が、ほっとできる場所や時間があったり、セルフコントロールスキルを身につける機会を充実させるということで、心の校医というのがありますが、これは岐阜大学の医学部の小児神経科医のドクターがほかの校医と同じように関わっていただいています。

登校は、ほかの子の登校とずれるようにするために、9時35分が登校のスタートになっております。ウォーミングアップして、そして授業をやって、セルフデザインというのは、要するに音、美、技、体みたいなのを一つにまとめて、その分で770時間に減らしたということです。終わってから、普通は帰りの会というのですけれども、クールダウンの時間があるという、こうしたカリキュラムになっていて、学習場所は自分で選択し、お昼御飯はどこで食べてもいいことになっていて、1日の生活を見直すクールダウンの時間があるということです。

例えば、家庭学習を中心にやって、その他はオンラインでやりますよという子もいますし、それから火曜日と木曜日だけ来るよという子もいます。週何日来るかとか、家でやるよとか、選択することができるようになっていきます。年度途中でやり方を変えてもいいということで、そこは相談してやりましょうということです。

いろいろな場所で、教室で学ぶ子、自宅で学ぶ子、それから特別教室で学んでいる子ということでのいるわけですね。

これは、授業をこうして流していますから、家でやっている子、今オンラインで3人の子が視聴しているよということが先生には分かるわけですね。帰り、夕方にはクールダウンの時間があって、オンラインの子と1日終わって今日はどうだったと話をしているわけですね。この時間は、子供にとってはすごくいいらしいです。今日先生に何話そうかと一生懸命考えているみたいなことを言っていました。

社会とのつながりの場という、地域からとかいろいろな人も入っていただけるのですが、私はこれをもっとたくさんやるべきだと思っていますけれども、なかなか学校も大変で、引き入れるというのは難しいのかもしれない。これは、セルフデザインの音、美、技、体をそれぞれ自分の好きなことをやっていくということですね。

服装、持ち物など細かい規則はない。スマホなど貴重品は鍵付きのロッカーで保管する。給食はなくて、弁当持参か業者に頼むということですね。

学級担任も5月の連休明けに決めて、2か月に1度希望調査をするということです。特定の先生がいいよと言ったのが25名、複数を指名したのが10名で、誰でもいいよという

のが5名ということだそうです。

この学校は、不登校特例校として位置づけるのですが、各学校への影響力とか、それからエールぎふというのは子ども・若者総合支援センターと、それから青少年会館とかフリースクールとかその他のところとの中核として位置づけて、学校へなかなか通えない子供たちのフォローアップをしていくという役割も担わせています。

スタッフとしては、校長1名、教頭1名、主幹教諭とか、この辺が県費負担教職員ですが、このいじめ対策監というのは岐阜市が独自で配置しております。養護教諭、事務職員は県費です。スクールカウンセラーは市費です。その他に特色があるのは、通級指導教室を二つ持っていますので、夜に子供たちを呼んで通級をしてもらうことですね。県の配当に加え、岐阜市が何人か市費で配置しているという人事配置です。

これは個人ロッカーなのですけれども、校務員が一生懸命塗ってくれた教室で、ピクトグラムというのですか、こういうので、教室も1年とか言わずに森、海とか、そう言っているのですけれども、こういう普通の学校にはない机や椅子を用意して、タブレットで授業をオンラインで配信していますので、普通の学校の相談教室にいる子供たちもこの授業を受けている子供たちもいます。そうすると、連帯感を持つらしいです。こうしてやっています。これはタブレット専用で、この先生がタブレット担当としてほかの子供たちと家にいる子供たちと1対1で授業をやっているところです。これは面白いのですけれども、個別ブースがあって、教室になかなかいられない子供たちは、こういうところで勉強している子もいます。毎朝来たら、自分が何時に来たかというのと、体調とか気分とかいうのを一々自分で入力して、それを先生が把握することになっていますが、これはイマここボードといって、私はここで勉強していますよというのをこうやって貼るのですね。先生は、それでどの子がどこにいるかを把握するようになっていきます。これは、なるほど面白いなと思っていますけれども。これは校長ですけれども、校長室でこうやって勉強している子もいるという。これは、地元の銀行から寄附していただいた図書館の施設ですね。何千万円寄附していただきました。漫画がたくさん入っています。これは、岐阜市の中学校の方から寄附していただいた楽器です。これは、校長の趣味でランニングマシンを買ったのですが、こんなの要らないだろうと言ったら、結構子供たちが使っているからびっくりしました。これはアゴラといって、岐阜市の学校にはアクティブラーニングルームが全ての学校に準備してありまして、そこを活用するようになっていきます。これは、一番お金かかったトイレですね。これは、相談室。

ということで、ここまでは用意して子供とやり始めたのですが、この前ここへお話をしに行かなければいけないので、その後どうなったと聞いたら、やはり子供たちがいろいろなイベントをやり始めたというのです。ここは、朝来たらここで体温を測って、自分の機嫌を入力して、ロッカーへ弁当を置くのですが、ここに電子レンジがありますので、弁当を温めています。ここに連絡ボードというのがあって、これは結構面白いらしいのです。餅つきパーティーやりますよとか、ボランティア募集しますよとか、マスコットキャラク

ター募集していますとかいって、子供たちはここにいろいろ貼り始めてます。それで、これはハロウィーンをやったらしいのですね。それから、これはすぐそばにマンションが建つのを見学しに行ったり、私たちも遠足へ行きたいというので、地元のタクシー会社にバスを提供してくださいとこの子たちが頼んで、それで名古屋港水族館へ行って、バックヤードツアーも参加できたというのが地元でも記事になったということです。これは、焼き芋パーティーができるようになったということです。これは、和紙で卒業証書をつくりましょうというので、特別支援学校の子と一緒につくったらしいですね。これは、開校後の様子ですが、4月から7月までで、その後はないのと言ったら、ほとんど変わりませんと言ったので、そのまま持ってきましたけれども、2,840日総数としてある分の771日が欠席なので、欠席率は27.1%です。4分の3は出席しているということです。この子たち、ほとんど学校へ行けていなかった子供たちですものね。これをどう評価するのか、私どもはあまり数字で追うなよとは言っているのです。だけれども、まあまあこうした結果で、なかなかいいのではないかと。これも登校希望が、だんだん毎日登校する子供たちがふえていっているということです。最初は、数日登校から始めようと考えていた子供たちが21人いたけれども、毎日通うようになった子供がどんどんふえていっているということだそうです。

出席扱いはどうするのだという話ですけれども、文部科学省が家庭で学んだ日を出席扱いとする要件というのを上げておまして、保護者との十分な連携ができていること、ICTを活用したこと、それから職員が十分に把握できることというのは、条件として整っているの、これは出席扱いにしますよということです。

今の3年生が、どんな進路へ進むのかというと、全日制の高校へ行くのは4名、それから通信制を希望しているのは11名で、全部で15名ということで、みんな進学するようです。東京の学校に行く子もいるらしいです。

保護者の学校評価。生徒と教員は、まだこれから休み明けに取ると言っていましたので、集まりませんでしたけれども、親が言っているのは、子供の居場所があるだけで安心。信頼できる先生ができて、楽しそうに通う子供が見られて幸せです。前の学校に比べてプレッシャーがなくて、転校して本当によかったと思う。それから、先生方が試行錯誤を重ねながら子供たちに寄り添って支援をしていただくことに対して感謝しているという。これは家ばかりにいるのではなくて、少しでもつながりができたという実感をお持ちなのだと思います。

いじめ自死の被害者のお母さんと、一遍見に行きましょうよと見に行ったのですけれども、そのお母さん、こういうことをおっしゃいました。「我慢に我慢を重ねて破綻するので。そのときは全てをシャットアウトしているのです。決定的なことになる前に、辛いときはこういう場所があるのだという情報を全ての子供たちに知らせておいてほしい。要は、あなたの学校、あなたが行く場所はその今いる地域の学校だけではなく、その狭い世界だけではないということをしつかり教えてあげてほしい。一時避難的に行ける場所、傷つい

た子が生きる場所、いろいろな選択肢があることが当たり前という考え方になってほしい。担任の、不登校を出すのは恥という意識を変えてください。休みやすい、逃げやすい中学校があるということを紹介してください。もっと早くこの学校があれば、うちの子は救われました。」とおっしゃいました。

ある生徒がインタビューに答えました。そのインタビューの中で「私たちは今ここで学んでいます。今の学校に辛くて苦しんでいる仲間には、こういう学校があるということを知ってもらいたいと思います。だから、私はインタビューを受けることにしました。」と書いてくれました。まさに御遺族と響き合った感覚を持っているのだなと思いました。

今後は、これは教育委員会が言ったことではなくて、私はこうしたらいいなと思うのは、特例校を小学校へ広げること。他の中学校の特例校をつくることもあると思うけれども、こっちのほうがより必要で、小学校4年生ぐらいから、早くつくるべきだと思っています。それから、それとは別に、例えば校区を定めない中学校、特例校でなくてもいいので、盛岡みたいな大きなところだったら、その可能性あると思いますけれども、この学校は校区を定めませんから来てくださいねという、やる授業は普通というのもきっと集まるだろうなと思います。子供だけになるかどうかというのは、一時期、校区の自由化というのを文部科学省が言いました。どこの学校を選んでもいいよと。あれはうまくいかなかったのです。ほとんど動かなかったし、学校はうちの学校のよさはこれですよと全市民に言って、ものすごい労力を使ってやったのに、動いたのは2、3人で、部活動で行くぐらいのものなので、あまりうまくいかなかったのですけれども、私は校区は校区で定める必要はあると思いますが、それとは別に、普通の自分の学校、エリート校にはしたくないとは思いつつ、そういうやり方はあるのだろうなと。

それから重要なのは、一般校の適応指導教室とか、ほほえみ相談室とか、いろいろなのはやっていますけれども、一般校のそこを特例校の分教室みたいにして、カリキュラムがそこで実現していくというのは、自分の学校に通いながら、そこで特別なカリキュラムによって救われる子供たちもいるだろうと思うのです。

教育機会確保法は素晴らしい法律だと思いますし、地域の学校は大切であり続けなければいけませんけれども、そこに違和感を感じる子供がいて、その子たちに社会とのつながりをどうにかつくるということが大事で、草潤中学校の波及効果というのは岐阜市全体、県下全体に大きく広がったと思います。市全体で機会均等することを考えていくというのがこれから大事で、そうした平等の考え方を転換させていくということもありなのだろうということは思います。

コールマン報告・プラウデン報告・プラスと書いてありますけれども、子供に大きく影響を与えるのは四つのことがあると言われてはいますが、一つは学校の環境です。それよりも学校の先生の質です。それよりも関係があるのは、親の経済力ですね。これは非常に大きな問題です。けれども、親の経済力は関係あるけれども、だからうちの子はもう将来がないというのではその人の人生終わりですから、そうではなくてそれよりも関係あ

るのは親の接し方というのがわかっているわけです。その親の接し方と同じ力があるのは、地域の教育力の集合的有用感と言われているのですけれども、あるそうなのです。それは嘘みたいな話だけれども、思い出してみれば、思春期の頃、親の言うことは聞けなくても、地域のお兄さんやお姉さんが「頑張ってきてね」と言ったら「はい」と言うことは幾らでもあったわけで、そういう多くの目が子供を支えていくという大切さというのはやはりあるわけなのです。親や先生から褒められることも大事ですが、いろいろな人から褒められるということは物差しが多くなるということですし、選択できる学びにつながっていくのだということを思っています。

今日は、私の趣旨ではなかったのですが、いじめの話や家庭教育の話はしませんでした、もしよければ2月の中旬まで流しているそうなのです。岐阜市PTA連合会のホームページにこのパスワードを入力していただければ、いじめについてはもう少しディープに話しております。

今日お話ししたのは、統廃合の問題があり、跡地活用をどうしようかということがあり、教育機会確保法であり、いじめの事態に遭遇して、そして草潤中学校をその思いを込めて結晶として作り上げていったというようなお話でございます。

皆様の大切な時間を共有させていただきまして、ありがとうございます。どうもありがとうございました。(拍手)

○吉田敬子委員長 早川先生、大変貴重なお話をいただきまして、ありがとうございます。た。

これより質疑、意見交換を行います。ただいまお話しいただきましたことに関しまして、質疑、御意見等がありましたらお願いいたします。

○小西和子委員 今回の教育の中での最大の課題だと私は捉えております。ありがとうございました。

私も小学校の教員をしておりまして、私が勤務していた時代は、そんなに不登校などというのはまだ出てきていないあたりで、学力向上とか部活動でいい成績をとるように傾いていったあたりから不登校がふえてきたなと感じております。特に子供が演技をしなければならぬというところ、わかります。道徳の指定校は、必ず荒れるということがあります。つまり、子供たちが思っていないことを言わなければならないので、子供たちが荒れるのですね。そういうことも経験してきました。

私がお聞きしたいことは、実は盛岡市の小中学生の不登校の出現率が、ここ4、5年で4.5倍にふえているのです。これは、かなり由々しきことなのです。今お話しいただいた草潤中学校のような、そういう学校をつくらなければならないと私は思うのですけれども、どうも盛岡市の先立ちの人たちにはそういうのが全くなくて、いまだに古い校訓とかを掲げている、昭和の初期から同じものを掲げているような学校が多かったりするのですが、そこはどこから切り込んでいったらいいのかということです。

子供たちは、学校が大好きなのですけれども、行けなくなる、私から言うと来れなくな

るのです。学校に行こうとすると体調不良になるとか、そのうちに昼夜逆転したりということになって、保護者もお手上げになるというのが一般的な流れなのではないかなと思うのですけれども、盛岡市で草潤中学校のような学校をつくるとしたならば、どのような働きかけをしていったらいいのか御指導いただきたいと思います。

○早川三根夫参考人 先生がおっしゃったように、小学校の子供や幼稚園の子供が、友達が面白いことと言って、そうしたらぱっと先生のほうの顔を見て、先生と一緒に笑っていてくれるかどうかというのは、すごく気にしてくれますよね。そういうのはすごくいいことだと思うのです。先生の影響力があるというのは、それが、中学校のときもそういうことはあるのだけれども、ぱっと振り向いて見るということが先生の御機嫌を取るためにだんだん変質していくということがあって、それは大人の社会でもあることだと思うので、そのことは子供の責任ではないと私は思うのです。

先生が、自分たちの子供たちはいい子供たちで、授業で一生懸命手を挙げて、頑張っとうる子供たちだと思込んでいることが問題だと思うのです。そうではなくて、中には悲しみを抱えて、不安を抱えて苦しんでいる子供がいないのかと。だから、子供たちが表に出している姿だけで気持ちを理解しようとしなないこと。だから、亡くなったお子さんも前日までは普通だったのです。朝学校へ出ていくときだって、修学旅行の写真代を持って、家でいつもと同じように朝シャワーを浴びて、写真代を持って出て行ったのですから。まさか、家を出てそんなことになるとは思っていなかったと。

そのようにして整える中であつたとしても、心の不安や決意を後から我々も知ると、彼の中で必然があつて、死の一点に、そこへ行ってしまうことはよく理解できてしまうわけなのです。そのように、子供一人一人の悲しみや苦しみがあつたという前提と、それからもう一つ、伝統があり、それから今までの日本が培ってきた義務教育のよさがあり、私がそういうことを言うと言弊があつたけれども、義務教育の原理主義者みたいな方々がいらつしや、でもそれはそれで私大事だと思うのです。そういうことは、日本の教育は今みんな知つていて、草潤中学校みたいにしなさいという話ではないと思うのです。

けれども、学級の中でそうした苦しみを持っている子供たちがいるのだったら、先生は気がつかないかもしれないけれども、子供たちは気がついていること。第三者委員会の聞き取りで、100人の子供たちがそのことを知つていたというのです。100人の子供が知つていても関わらず、そして知つている親がいる中にも関わらず、私たちだけが知らなかつたのです。その子の親だけが。これは本当に残酷だと思います。

けれども、他の子供たちが見ているわけですから。そういう子がいないほうが不思議だと私は思つています。では、そういう子がいたとして、学校の担任も見つけれなかつたとして、その子の行き場所はどこにあるのですかというの、やはりそれをつくるのは社会の役割だと思つています。

だから、伝統のある盛岡の教育、伝統のある岩手の教育というのは揺るぎないものであり、いいけれども、それ以外の教育というのが今この世の中ではやはり必要になってくる

のだと。もう一つのオルタナティブな学校が必要になっているのだということは、やはり認識していく必要があるのだと思います。

だから、この問題が教育を本質的に変えていくという捉え方をすると、恐らく政策的には動いていかない。そういう子供たちのために特別の学びの場が必要なのだという、正しいかどうかではなくて、わかりやすいかどうかというのが行政的には恐らく大事なことだと思うので、統廃合のときもそうでしたけれども、だからそうした整理整頓が恐らくなされるのだらうと思います。

だから、私自身も結論が出ていないのですけれども、教育を本質的に変える問題なのか、それとも一部の子に対しての対応できるべきものをつくることによって全体に波及効果を求めていくものか、恐らく後者でないと思わないと思うのです。だから、その辺の理解を皆さんにさせていただくために、そういう問題意識を抱えていらっしゃる子供や親や先生は必ずいるわけで、ただ語弊あるかもしれませんが、教育委員会にいる先生の中で、自分の過去の成功体験だけでことを済ませていこうと思うと、それはやはり困難性が多いのです。私の場合は、亡くなったお子さんが必要性をしっかりとメッセージで残していただいたということが不転の決意を与えてくれましたけれども、ことがあってからでは遅いので、その前にできることはやっておくべきだと思います。

○小西和子委員 教育の機会均等とずっと言われてきたのですけれども、東京の練馬区の旭丘小学校と大船渡市の立根小学校の同じ規模の学校の教職員数を比較しました。練馬区では、教職員数 52 人でした。立根小学校の方は、何と 21 人でした。半分以下の教職員でやりくりをしているのです。そうすると、子供たちが言うように、先生が忙しそうだから相談できなかったというのはいっぱい聞きます。機会均等ということで、この岩手の地にも十分な教職員の配置が必要だと思っております。

先生から多くのことを学びましたので、岩手の教育をどの子も誰一人取り残さないような教育ができるように、私どもも力を尽くしていきたいと思っております。ありがとうございました。

○千田美津子委員 本当に一つ一つもっともだんと頷きながら聞いておりました。

それで、子どもの権利委員会というのがあるのですけれども、そこから日本の教育や子供たちの現状に対して、世界的に見て過度なストレスを抱えるような教育の現状になっているということがずっと指摘をされてきて、そこからさまざまな歪みが出てきていると私たちも思っています。8割の子供たちは、何とかそれを乗り越えているのですが、そうできない子供たちに対する手だてが全体的に遅れていると思っております。

日本でも、今、子育て支援条例はどこにでもあるのですけれども、子どもの権利条約に合ったような、子供の権利という観点からの取り組みがやはり弱いなど。そういった意味で、不登校の子供たちや、そういうさまざまな子供たちが行ける場所をつくっていくというのは、本当に子供たち自身の権利という点からも非常に大事だと思っております。

それで、子供の権利ということからすれば、今、岐阜市さんだけでなく、全国の取り組

みを、どのようにお感じになっているか、その点をお聞きしたいと思います。

○早川三根夫参考人 私は全国のことをよく分かっているわけではないのですが、過去のことを振り返ってみると、私の教師経験の中で、本当に申し訳なかったなと思うことばかりです。あの頃、発達障がいという言葉もなく、ふらふら歩くやつには「おまえ、座っとれ」とか言って無理やり座らせたりしていました。また、すぐかっとなる子がいましたが、思い出してみると、隣の女の子がぼそぼそと喋ると、その子はすっと大人しくなることがあったのです。だから、隣の女の子は、私と違い、その子の何がどうなのかということを知っていたのですよ。本当に多くの子供たちを傷つけて、自分の思う通りにしようと思ってきたことに反省がたくさんあります。

子供は、決まったルールの上を流れるように成長していくものではないので、自分がそのルールを敷いていると理解していなかった私が、世間で偉そうなことを喋っても「おまえ、そうだったのか」と過去のことを言われると、本当に多くの子たちを傷つけてきたなという反省ばかりですが、反省してももう遅いわけであります。

そういった中で、子供の権利をしっかりと見据えて、そこを基にして教育は進められなければいけないのですが、さっきのお話にも通じるのですが、学級を中心とした学校経営が営まれているというのは、日本の大きな特色なのです。そのよさは、やはりあると思います。そのよさを維持しつつ、もう少し学級を緩めて、団結力でぎらぎらさせ過ぎないで、もう少し出入りの自由な集団で、子供からいえば選択できるような場を学校が意図的につくることによって、救われる子供がたくさんいると思います。それが人権を守ることになるのだらうと思いますので、ぜひ校長先生方には、素直だけれども、主体性が無いと言わずに、本当に主体性を育てるのであれば、素直ではない子供を育てるぐらいの気持ちになっていただければ、人権を守ることにより近づいていくのではないかと、これは私の反省でもございますが、そのように思います。

○関根敏伸委員 やはり不登校に悩んでいらっしゃる子供、保護者さんがたくさんいらっしゃるやいまして、この草潤中学校というお名前は聞かせていただいていたのですが、ぜひ岩手にも欲しいという親御さんの声は取り上げさせていただいていますが、今日お話を伺って大変参考になりました。

何点かお聞かせいただきたいのですが、岐阜市の場合はこういう形で特例校をつくられているわけですが、岩手を含め、まだまだの地域があります。そんな中、まずこの草潤中学校とエールぎふという支援センター、フリースクール、あるいはその他の居場所と連携をしながら、草潤中学校が中核的な役割を果たしていらっしゃるということなのですが、これがどのようなになっているのか、もう少し詳しく教えていただきたいと思います。

岩手の場合は、今年度、民間のフリースクールなど、民間で居場所づくりをやっている方々の委員会的なものがようやくできましたが、それも1回オンラインで開催されたばかりで、そんな緒に就いたばかりの状況なので、草潤中学校だけでなく、関係する施設等が具体的に機能されているということが非常に興味深いです。どのような形で連携、情報共

有、情報交換をして、それがどう学校現場やいろいろなところに活かされているのか、詳しくお聞かせいただきたいと思います。

○早川三根夫参考人 まず、エールぎふは、それも学校の跡地活用でつくった施設です。子ども・若者総合支援センターという名前になっておりまして、おぎやあと生まれてから二十歳までの子供たち、子育ての悩みや相談に全て乗るというので、110人体制でスタッフがいます。ワンストップで、何か困りごとが学校から来たり、親御さんが連絡してきたり、相談の電話かかってきたりしたら、それを幼児教育担当とか、いじめ担当とか、各担当に振り分けて、スタッフで問題解決していく、学校に入っていくという、発想としては、児童相談所にお世話になる前に、学校と一体となって解決するための組織として中間的に位置づけたものです。学校でいろいろ問題になるお子さんに対しては、ほとんどエールぎふが情報を持っています。幼児期からのデータも持っていて、それを小学校、中学校、高校へつないでいくこともやります。

今回の定員40人を選ぶにあたっては、エールぎふの情報が基になりました。また、面接や制度設計にもエールぎふの担当が入りました。エールぎふには、教員として派遣されている者もいれば、児童福祉士や心理職の者もいますし、精神科のドクターも非常勤で入っています。

盛岡市は中核市ですよ。中核市だと、国も児童相談所をつくれと言っていますけれども、岐阜市としてはなかなか大変だということで、その前にそうしたことに對してやれる組織をつくった方が恐らく全体としては効果的だろうということで、そういうのをつくって、今回そことの連携というか、ほとんどスタッフが一体化してやれているので、大変助かっています。

もう一つは、フリースクールとの連携につきましては、つくる前に、これを見ていただきますと、2018年に制度設計をして、2019年に予算をつけて、2020年から開校ということなので、すごいスピードでやったのです。3、4年ぐらいで。その間に、つくる前にフリースクールとは3回ぐらい会議を持ちました。そのとき非常に印象的だったのは、教育委員会に私たちの考え方を聞いてもらえるなんて驚いたとおっしゃっていました。だから、やはりフリースクールの人たちの悩みは、もっと学校がこうしてほしいとか、行政はこうしてほしいという願いがすごく強いと思うのです。そこを我々が隙間を埋めているのだという。だから、そこは行政から声を掛けることによって、それぞれの立場とか、フォローアップできることが非常にうまく行くと思うのです。今草潤中学校の運動場を使ってフリースクールの子が遊んだり、フリースクールの子とバンドをつくったりということも始めたり、草潤中学校へ行っている子が放課後はフリースクールに通ったりということもありますので、その辺は相乗効果があると思うのです。

あると思うのですが、恐らくまだまだ足りない。年に2、3回の定期的な話し合いだけでは、まだ恐らく足りないと思うのですけれども、そこは今後セーフティーネットを市全体でつくり上げていくためには重要なポイントだと思います。

○**関根敏伸委員** いっぱい聞きたいことがあるのですが、この問題は、今日は不登校という切り口で教育委員会側の先生の経験を踏まえたお話ですけれども、当然ひきこもり、ニート、そういうことが総体的に絡んでくる問題ですよね。全て縦割りになっていますので、不登校は教育委員会、ひきこもりは県でいうと保健福祉部、ニートになると若者女性支援とか、みんなばらばらになっておりまして、施策が一体的に実はなっておりません。

先般も県の教育委員会の職員とも話しをしたのですが、やはり教育委員会の先生方は、フリースクールに対しても、法的にも明確な位置づけではないと、何をやっているか正直あれだよねと、そういう意識を感じますし、学校に戻さないという教育機会確保法はありますが、では教員の先生方は、そういう意識を皆さんが持って授業されているのかというと、やはりそうではないのだろうなど。そういう現状の中で、現実的に不登校はふえる、ひきこもりはふえる、ニートはいる、トータル的な相談支援ができない、そういう状況が岩手だけではなくて多くのところであるのだろうと思います。

その上で、草潤中学校みたいなものができればいいのですが、できない場合に、いわゆる相談の場の必要性ということは、先生が冒頭訴えていらっしやいましたので、不登校の子供や、トータル的なニート、ひきこもりも含めたいろいろな形での相談体制をやはり構築していくことがまずは必要ではないかと思うのですが、取りあえずどういうところから、県なのか、市なのか、動いていくべきというのを御示唆いただければなと思います。

○**早川三根夫参考人** 恐らく県議会で相談体制の充実というような質問をされると、県教育委員会はこれもやっています、あれもやっていますとか、窓口がたくさんありますとお答えになっているのだと思いますけれども、県教育委員会側、教員の行政側としては、やはりそうした気持ちはあるのだと思うのです。

自殺があったときには、窓口はこれだけありますよと新聞には必ず出るし、その相談体制は、どんどん拡充はしていかなければいけないけれども、一番重要なことは何かというと、今回のうちの事件もそうだったし、弥富の事件もそうだったのですけれども「大丈夫」と聞いたら、子供は「大丈夫」と言って、それで終わっているのです。大丈夫が大丈夫ではないのだということを先生一人一人や、相談を受けた、声をかけた先生、心配された先生が理解して、その次の段階フォローアップをできるかどうかというのは、決定的なことだと思うのです。

「大丈夫か」と聞いたら、みんな「大丈夫」と言うに決まっているのです。私は、次の日にもう一回声をかけるとか、昨夜君の「大丈夫」という声を聞いたのだけれども、どうも引っ掛かっているところがあるというような、そういう大丈夫が大丈夫ではないという気持ちを全ての大人が持ったときに、救われる子供はかなりいると思うのです。

そうした相談の場の拡充と、こつというか、そういう見方を、現場の先生たちが理解しなければいけないのと、もう一つは、やはり子供の視点に立ってみること。皆さんも覚え

があると思いますけれども、先生のところには休み時間寄ってくる子供というのは、リーダーでもあるのです。本当に普通の子が先生のところに行って「先生、お話があるのです」と言うのはかなりハードルが高い。議員さんに「議員さん、相談あるのです」と言うのは、県民の方もハードルが高いのと同じように。しかも、昨夜先生が徹夜していたことを平気で子供に言ったりすると、子供は「先生、相談あるのです」とやはり言えないでしょう。

だから、根本的には教員数が足りないという問題はあるのですけれども、先生が優先順位を変えさえすれば、救われることはたくさんあるのです。学級通信をたくさん書かなくていいのです。そういうことを皆さんが言っていただけるといいのです。学級通信をたくさん書いてくる先生をいい先生だと世の中が評価しない。掲示がきちんとしている学校を評価しない。そうではなくて「大丈夫」と聞いて「大丈夫だ」と言われてもまた聞いてくれる先生をぜひ評価していただかないといけないと思います。

だから、そういう相談の場と質を変えていくということと、もう一つ心配しているのは、特例校をつくって、それがエリート校になることは、それは違うと思っているのです。ここはあるかどうか知りませんが、よく県立の中高一貫教育の学校をつくると、エリート校になっているということがありますけれども、最初はそういうつもりではないと言っても結果的になっていると。県立の特例校があっても悪くはないと思います。でも、それはすぐエリート校になってしまう心配もあります。そこをコントロールするのはなかなか難しいとは思いますが。また、夜間中学は県立の方が、市町村としてはなかなかつくり辛いところもあると思います。

もう一つ言えるのは、特例校ができると、恐らく多くの校長は楽になったと思います。自分のところのなかなか大変なお子さんが特例校に行けるようになったから、その分学校は楽になったとは一度も聞いたことないですが、そういう思いはあると思います。次の可能性として、心配なことももちろん出てくると思いますけれども。

根本的には教員定数をふやすというのは大事なことで、そのことは御支援いただきたいのですが、それと併せて見方を変えていくということによって救われる子供はたくさんいると思いますし、これも私の反省であります。

○**関根敏伸委員** 最後に1点だけ。少し細かなことですけれども、子供のセルフコントロールスキルを身につける機会を充実させるということが書かれていまして、その日課表の中でウォームアップとクールダウンという時間が設けられているわけですが、このクールダウンの時間も非常に重要だとお話されていたと思うのですが、このウォームアップ、クールダウン、これはどういうことをされるのか、これがあることでどのような効果があるのか、お聞かせいただきたいと思います。

○**早川三根夫参考人** 恐らく一般の学校では朝の会、帰りの会があって、皆の前で今日体調悪い人いませんかとか、今日一日これがありますから頑張りましょうみたいなことをやっていると思います。ウォームアップでは、先生が1対1で子供の対応を行うそうです。まず子供はデータ入力をしますので、その入力によって、それこそ大丈夫か大丈夫ではな

いなど、そのようなことでウオームアップをやります。ただ、子供が登校時間にびっちり来るといことはほとんどないらしいのです。やはり遅れてくる子が結構いるらしくて、その辺はゆっくり登校と言っているらしいです。

クールダウンは、特にオンラインでつながっている子供たちは、自分のことを話す大事な機会なので、それはすごく楽しみにしています。それも、全体の朝の会、帰りの会とは全く発想が違って、1対1であなたのことを大切にしますよ、あなたのことを心配しますよという学校からのメッセージと、私はこうしたいという子供からの願いをどう実現してやるかというための時間になっているのだと思います。

○武田哲委員 自分も親の立場、あるいはこれまでも市議会議員などをやってきた中で経験したことを振り返りながら、本日聞かせていただきました。

そして、この草潤中学校、子供たちにとっても、さまざまな悩みを抱えた子供、親もすごく安心して行ける学校であって、素晴らしいなと思います。

ただ、今現在他の中学校とか小学校で、この学校ができたことでどんな波及効果が出てきているのか、その中で他の一般の学校がどんな動きを見せてきているのか、その点をお伺いできればと思います。

○早川三根夫参考人 そこは、最も我々が狙っていることで、草潤中学校が草潤中学校だけ特別な学校で終わらないように、その波及効果をどう各学校や子供一人一人にまで波及させるかというのは、一番重要なことのひとつだと考えております。

最初に動いたのは、各学校にある、教室へ入れない子供たちのための適応指導教室の雰囲気のがらっと変わったということです。そこへ草潤中学校の授業も流れていますし、同じような感じでその先生たちの対応も変わっていきましてし、だから何々中学校草潤中学校分教室ですと校長も言うようになりました。それは、その子供たちにとっては直接的に恐らく影響が出ているのだと思います。

大事なのは、各学級の担任の先生が、あれは特別なことで、特別にやっているのだと思うのか、やはり子供の可能性をぼきぼき折っていたのだということをおもうのが非常に重要なことです。だから、学級全体で出入りがもう少し自由になり、他の学級へ入れないのが学校の不思議なところであり、約束としてあるのはおかしいと言われますけれども、そのようにして営まれてきた学級というものを、もう少しルーズにしていくことによって、子供の息苦しさが呼吸しやすいものになっていくと思います。各学校の先生に波及するかどうか、まさにこれからだと思います。

先ほどの京都大学の先生は、岐阜市の全ての学校の先生をここで勤務させてくださいということをおっしゃっています。全てここで勤務したら、学校は大きく変わりますということをおっしゃっていますが、現実全ての学校を草潤中学校みたいにやるというのは、マンパワー的にも絶対無理ですし、そうしたらぐちゃぐちゃになってしまう可能性のほうが高いですので、全体に対する波及効果ということは、周到にというか、御指摘のように緻密に見ていく必要があると思っています。いい面をどう波及させるかということですね。

○木村幸弘委員 私からは1点ですけれども、草潤中学校を取り巻くいわゆる地域とのつながりとか、あるいは理解と協力とか、その関係性がどうなっているのか。跡地活用をどうするかという議論の中で、学校が統合されていく地域があり、もう一方で跡地活用という形の中で、この草潤中学校を設立するプロセスの中で、地域社会とどういう関係があったのか。あるいは、草潤中学校という学校づくりに対して、地域の方々からどういう反応や、あるいは先ほどの御説明だと環境整備を含めていろいろな協力があったということなのですけれども、最初からもともとそういう土壌があったのか、あるいは早川先生はじめ、そのプロセスの中で地域との関わりが出来たのか、どのような形で進めてきたのかをお伺いしたいです。

○早川三根夫参考人 先ほどもお話ししたように、地域とはけんけんごうごうのやり取りございまして、飲みに行くとか刺されるのではないかと冗談で話していましたが、教育とは何かとか、学校とは何かとか、地域と学校の関係はということなのか、それから地域が学校にできることはということなのかということは、随分話し合ったと思っています。その話し合いでの苦しみ草潤中学校ができたときに皆さんの協力につながったということは、非常に大きかったということになります。

私どもはこういう約束をしたのです。短期的には統合はします。中期的には、この場所は売らずに教育施設として使い切りますと。長期的には、この学校は、長寿命化が終わって、あと15年、20年ぐらいたらまた作り替えないといけないので、そのときは小中一貫校など、新しい教育の利用を実現する学校をつくりますという、大きな三つの約束をしていました。中期的にはこの草潤中学校をつくらせてくださいと、それは御理解いただけました。あと、長期的については、今は小中一貫校と言っているけれども、それが本当にいい仕組みかも含めて、岐阜市全体の学校の再編成の中で考えていきたいと思います。そのために、草潤中学校は大きなヒントになると地元には御理解いただいていますし、こうやって注目されていることがまた彼らのやる気にもつながっていると思いますので、以前にも増して協力体制をいただいているというのは、感謝に堪えないということでございます。

○佐々木努委員 入学前の個別面談の中で、かなりの方がお見えになって、最終的に入学者を絞る作業は、どういう手順になっているのか。かなりの方が入りたくても入れなかったと思うのですけれども、その辺のところの内情についてお話しいただきたいです。あと、希望する先生に来ていただくということなのですが、希望はあるものなのか、もしない場合はどういう形で先生を確保していくのか。

また、開校以来の先生方の感想というのは、これから調査をされるということでしたが、今の時点で何か聞いているようなことがあれば、子供の変化とか、あるいは先生御自身の変化とか、聞いていらっしゃるようなことがあれば教えていただきたいと思います。

○早川三根夫参考人 まず、1点目の入学前の面接についてですが、これは藁にも縋るような気持ちで皆さんお出でになって、40人しか駄目というのがどんなダメージを受けるか

は、我々も大変心配しておりました。実際ダメージがあった人もいますけれども、2件だけ、どうしてうちは受からなかったのですかというお問合せはあったようです。それは御説明して御理解いただいたと。その後、統計は取っていないですけれども、学校の特別支援のところへ行けるようになったり、それからオンラインでつながって精神的に安定したという話は聞いております。ただ、やはり落ちたことに対するショックをどうフォローアップするかというのは大変大きな問題でした。

基準については、幾つかの項目で点数化されていまして。やはり情報公開の世の中ですので、情報公開しろと言われたときにきちんとやらなければいけない。でも、一番は、この子はこの学校に来てよくなる可能性があるかどうかという基準で見たと担当が言っていました。だから、本当にこの学校で変わろうと思う意思があるかどうかということで、全く来ないような子は、やはり想定としては難しいだろうということで選んだと言っておりますが、この中に先ほど言ったエールぎふのスタッフと、それから児童神経科医のドクターも全部関わっていただきましたので、そうした医学的な面からも、心理学的な面からもフォローアップはされていると思います。

学力で選んだのではなく、WISCとか、心理テストを行い、そうした中で選んだということです。女の子の人数が多かったですね。

それで、2年度についても入りたい希望があって、2年連続受けてくれる子供たちもいるので、そういう子たちがここで選ばれないというのが精神的にどうダメージを受けるかということは、非常に注意深く見ていかなければいけないということもあるだろうということです。

それから、教職員の希望については、ほとんど埋まりました。埋まりましたが、全部ぎらぎら、ここでやり切るぞみたいな先生ばかり集まると、子供たちがかえって苦しいので、その辺はあまりやる気だけで決めないで、総合的に選んでいます。

ただ、理科か英語か何かは希望者がいなかったようなので、それについては、校長から声をかけたようです。この校長は準備室の室長からやっていますので、もっと言うならばいじめのときの課長でした。いじめのときの課長で次の年準備室の室長になって、草潤中学校の校長をやっており、教員についてはよく分かっていますので、私は一切口出さずに彼の選んだやり方でやるようにはしました。

先生方は、大変迷っています。どう接していいか迷っています。これでよかったかな、どうかなというのがやはり職員の中心の話題のようです。子供が担任を選ぶとき、あれも面白いのですけれども、40人いる内の10人ぐらいは誰でもいいと言ったのです。誰でもいいけれども、担当が少ない先生がいいということで選んだようです。途中、担任を替えた子供は2人か3人いるらしいです。それはどうしてと聞いたら、いろいろな人に知り合いたいと、前向きな理由にはなっているようですが。

ここの学校、帰りはすごく早いのです。残業ほとんどなしだと言っていましたので、そういう意味でもモデルにならなければいけないと思っております。

○白澤勉委員 私は、先ほどの質問にも関連しますが、40人の規模感の受入れの部分しかないのですけれども、多分全県的にも同じような問題を抱えているのだと思いますが、岐阜県の教育委員会でもお仕事をされておりますが、これはあくまでも今の市の中の対策という部分でありますけれども、これが県全体として、県の教育委員会は、どのように次の発展的対策というか、そういった不登校を抱える子供たちの学びの場の獲得を考えているのかお聞かせいただきたい。あと、予算的な話で、市の方で単独で措置しているのかもしれませんが、いろいろ交付税措置の対象になったり、あるいは市立だと、なかなかやりたくても県で補助して、市立のそういった不登校というか、通信だとか、こういった部分の学校への運営費補助という部分をやろうと思っても、交付税措置の対象になっていないという問題があって、県としても一歩踏み込んでできないというような課題もあったり、そういう話も聞くのですけれども、県教育委員会でこの取り組みを全県下で広めていくのだという県の覚悟というか、そういった部分はどのような感じなのかお聞かせください。

○早川三根夫参考人 県と市の関係はいろいろあると思いますが、私どもは岐阜市と岐阜県との関係は、私が教育長の頃は、私がこのようにやりますよと言えば、県はわかりましたと言ってくれました。みんな私の後輩ばかりですので。新しい学校を一所つくるから、それに合わせて教員をまず配置してくれと言ったのです。それと、不登校の生徒のための学校だから、全国的にも注目があるから、加配をできるだけよこしてほしいと。それから、スクールカウンセラーも、普通の一般の基礎的な配置よりも、恐らく県はプラス4人ぐらいは余分に配置していると思います。他のことはやらなくていいから、人的措置はちゃんとやってよ。そうすると、一番掛かる人件費は県に持ってもらうということですから、それはありがたいです。途中の段階で県にいろいろ相談したりということは、全くございませんでした。とにかく人的配置だけやってくれとお願いしました。

ただ、周りの市町村は、私ももちろん説明はしてはいたけれども、周りの市町村の議会からは、岐阜市はああやってやるけれども、うちはどうするのだということは盛んに質問が出たそうです。だから、うちは適応指導教室をそのようにしますよと言うけれども、特例校となると、やはり文部科学省とのやり取りに1年半ぐらいかかりますので、そこまではしていないけれども、そのようなものをやるということを周りの人からは言われました。

その後、県の動きとしては、先ほども御質問ありましたけれども、フリースクールとの連携が必要だという認識がありましたので、県のレベルでフリースクール、特例校、それから高校の定時制とか、ああいうところで不登校に関わる人たちの協議会をつくって、そこで子供たちの学びの場をどう総合的に確保していくかという会議は始まっております。

あと、他の予算については、あまりこちらから県の方に財政的な支援をお願いしますということにはなかったと思います。以上でございます。

○吉田敬子委員長 他にありませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○吉田敬子委員長 他にないようですので、本日の調査はこれをもって終了いたします。

早川先生におかれましては、本日はお忙しいところ、不登校特例校である草潤中学校の取り組みや不登校問題から考えるこれからの学校のあり方、統廃合、いじめ自死等、本当に多岐な分野にわたってお話をさせていただきました。御丁寧にお話をいただきまして、本当にありがとうございました。

○吉田敬子委員長 委員の皆様には、次回の委員会運営等について御相談がありますので、しばしお残り願います。

次に、4月に予定されております当委員会の調査事項についてであります。御意見等がありますでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○吉田敬子委員長 特に御意見等がなければ当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○吉田敬子委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。ありがとうございました。